

自然・人・歴史の恵みが育む活力のまち!! 未来を担うのは自ら考え楽しく学ぶ次世代

根尾川・樽見線沿いに延びる 南北に長いまち

平成16(2004)年2月1日、旧本巢町・
真正町・糸貫町・根尾村(いずれも旧本巢郡)
の3町1村(以下、旧4町村)による合併で誕
生した本巢市の市域は、木曾川水系の一級河
川・根尾川に沿う形で、南北に細長く開けて
いる。

また、市域北部の広大な中山間地域(旧根
尾村)で頻繁に蛇行し、市域中央部(旧本巢
町)から南部(旧糸貫町、真正町)にかけて濃
尾平野をゆったり流れる根尾川沿いには、第
三セクター樽見鉄道・樽見線が一本の軸のよ
うに走り、根尾川とともにあたかも背骨のご
とく、市域を南北に貫いている。

同様に国道157号がほぼ根尾川沿いに、
市の中心部を南北に縦断。北側は福井県大野
市を經由して石川県金沢市に至り、南側は北

方町を經由し県都・岐阜市に至る。さらに国
道303号が滋賀県方面に、国道418号が
関市方面へと通っている。

南北43km・東西17km(最大幅)という数値を
見ただけで、本巢市域の細長さは想像できる
が、東西17kmの最大幅は主に北部の中山間地
域・旧根尾村地区の数値だ。中央部以南の濃
尾平野に広がる旧本巢町地区・糸貫町地区・
真正町地区の東西の幅は、おおむね10km
を切っている。また、本巢市の総面積計
374・65km²のうち、北部の旧根尾村地区だ
けで、全体の8割近く(約296km²)を占めて
いる。半面、面積が全体の1割にも満たない
南部の旧糸貫町地区・真正町地区(両地区の
合計27・5km²)に、現在の人口(令和3年3月
末現在3万3580人)のうち7割強(約
2万5000人)が集中している。

本巢市ではこうした地理的特徴を持つ市域
のうち、旧根尾村地区および旧本巢町地区北
部を《北部地域》、旧本巢町地区南部および旧

つとむ
藤原 勉
市長
ふじわら
本巢市



糸貫町・真正町
地区を《南部地域》と区

分し、それぞれの地区の実
情に応じたまちづくり計画を随
時、実施している(※平成30年策定
『都市計画マスタープラン』より)。

今回の取材に際し、取材者は本巢市役所を
訪問する前日に、最南部・旧真正町地区に位
置する北方真桑駅(きたがたまくわ)から最北部・旧根尾村地区
の樽見線終点・樽見駅まで、リゾート鉄道と



1500年余りも咲き続ける日本3大桜の一つ《淡墨桜》



根尾谷を流れる根尾川は濃尾平野の重要な水源の一つ



しても人気の高い樽見線に乗って縦断し、南に細長い市域をまずは体感してみた。

樽見線は起点の大垣駅（大垣市）から終点の樽見駅まで計19駅あるが、なんとそのうちの12駅が本巢市域に立地している。一つの鉄道路線で12駅も占めている都市は、全国的にも珍しいのではないだろうか。ちなみにその他の駅は、北部地域に隣接する揖斐川町域に2

駅が、南部地域に隣接する瑞穂市域に3駅が、さらに樽見線の起点・大垣駅を含め大垣市域に2駅が立地している。

「樽見線の駅の数の多さがまず、本巢市の地理的条件の個性を象徴しています。根尾川沿いに南北につながる旧4町村が合併したため、市域がとにかく細長いのです。そしてご案内のように、人口は南部の旧2町、旧糸貫町地区と真正町地区が圧倒的に多い。このエリアは、岐阜県でも人口密度の高い瑞穂市や大垣市の地続き的感觉で引越して来られる例も多く、トータルで人口減少の進む本巢市の中では、現在進行形で人口・世帯数が増え

つつある地域です。

このように、広大な中山間地域とその続きに位置して過疎化の進みつつある北部地域、平野部で県都・岐阜市や大垣市、瑞穂市に近く、人口が安定的に増えている南部地域という、非常に対照的なエリアに市域が二分されているところに、本巢市の良い意味での特徴とともに、最大の地域課題が如実に示されているといえます」

そう語る藤原勉本巢市長は、平成の大合併で本巢市が誕生してから4年目の平成20（2008）年に就任。以来、今年で4期14年目を迎えた。藤原市長が前職の岐阜県庁職員時代から合併前後の本巢市エリアの状況を注視し続けた結果として、就任以来ずっと最大の行政課題に掲げてきたのも「この北部地域と南部地域のいろいろな意味での格差の解消」（藤原市長）だった。



リゾート・トレインとしても人気の樽見線は根尾川沿いに市域を縦断



300年以上の歴史を誇る重要無形民俗文化財「真桑人形浄瑠璃」(旧真正町・真桑地区)

全国区的な評価を誇る 本巢市の地域財産群

「正直なところ、世の中全体に人口減少が進捗しつつある現状において、地区ごとに条件の違う市域全体にバランスよく人口を増やしたり、産業を振興したりするのは不可能です。でも、それぞれの地域の個性を地域資源に、各地区の個性にかなった形でのにぎわい創出などを実施していくことは、大いに可能と考えます」(藤原市長)

実際、本巢市を構成する旧4町村地区に

は、にぎわい創出に不可欠な《種》ともいべき実力に満ちた地域資源・地域財産群が、それぞれに存在している。

まず、最北部・旧根尾村地区の代名詞といえ、あの国指定天然記念物の《淡墨桜》だ。樹齢1500余年とされ、日本3大桜の一つにも数えられる淡墨桜の品種は彼岸桜(和名エドヒガンザク

ラ他)。木の高さ17・3m、幹回り9・4m、枝張りが東西22・4m・南北24・2mという堂々たる巨木で、満開から散り際にかけて、花びらが淡い墨を引いたような特異な色に見えることから淡墨桜の愛称が生まれた。

樽見線・樽見駅から徒歩20分ほどの小高い丘(淡墨公園)の上に屹立する淡墨桜は、取材時(令和3年3月24日)にはまだつぼみの状態だったが、4月上旬には満開になったとの報告が本巢市のフェイスブック上に掲載された。

「淡墨桜は継体天皇のお手植えだとする伝説のある桜ですが、昭和に入ってから急に生命力が衰えたとされます。昭和24(1949)年、その回生を依頼された前田利行さんは、山桜の若い根238本を根接ぎして、見事に

樹勢を回復させました。しかし、その後伊勢湾台風(昭和34/1959年)で傷められたりして、またもや枯れ死の恐れが強まりました。そんな状況が続いた昭和42(1967)年に、作家の宇野千代さんが淡墨桜の危機を雑誌に掲載してくださったのを契機に、県を挙げての保存運動が始まり、平成24年からはLEDのライトアップが人気になるほどに生命力が蘇りました。ところが平成30(2018)年9月4日に大型台風21号が直撃して、大枝4本が折れるなど、伊勢湾台風以来といわれる被害に遭いました」(藤原市長)

そこで立ち上がったのが、地元・根尾小学校・根尾中学校の子どもたちだった。根尾小学校の児童と根尾中学校の生徒は、淡墨桜の保護・維持活動をずっと続けてきた伝統を持つ。この子どもたちによる台風直後の淡墨桜のさらなる保護・維持活動に呼応する形で、地域や市内外の有志が集まり、《リボン淡墨桜》プロジェクトが始まった。このプロジェクトは台風で折れた大枝を活用し、新しい生命を吹き込もうとするプロジェクトだ。ある人は大枝から木彫りの仏像を作り、ある人は淡墨桜をモチーフにした染色作品を作り、子どもたちは絵画作品などを制作した。そうした多彩な発信を通じて、地域財産である淡墨桜への市内外の人々の関心を高める活動は今も続いている。だが「さらに素晴らしいのは、台風21号で大きな被害を受けた翌年の平成31年春、令和2年春と、淡墨桜が見



高校生に教わりながら数学検定に向け学習を進める児童たち



数学を楽しく体験する「数学ワンダーランド」(東京理科大学・数学科館監修)



《数学のまちづくり》は第28回実用数学技能検定「数研」グランプリ受賞

た伝統的な農業生産と合わせたバランスの良い産業振興を、今後各地区の実情に応じた形で図っていければと考えております。

その上で『特徴的なまちづくり』に特化していえば《数学のまちづくり》が際立って個性的なものではないかと自負しております。

《数学のまちづくり》は合併以前から、高木貞治博士の出身地・旧糸貫町地区で行われていましたが、本巢市の発足を機に、改めて多彩な取り組みを行うよう

事に咲き続けてくれたことでした」と藤原市長。そして前述のように、淡墨桜は今年も、取材後の4月上旬に見事な満開風景を披露している。

今年は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、例年のように開花状況を逐次公開することはできなかった。恒例の各種イベントも開催できなかった。しかし、人間たちを苦しめる自然災害や疫病などの歴史を1500年以上も見てきた淡墨桜の満開風景は、静止画や動画を通じ、現在進行形で新型コロナ禍に苦しむ日本全国に「変わらぬ生命の輝きと癒やし」を発信したといえる。

旧根尾村地区の地域財産は、淡墨桜だけではない。例えば清流根尾川を中心に、森林セラピー基地にも認定された緑豊かな中山間地帯が広がっており、エリア全体が森林リゾー

トの趣を持っている。

また、市域北部から中央部に位置する旧本巢町地区(本巢市本庁舎所在地)は千利休の後継者・古田織部の出身地であり、ホタルの里としても知られている。

市域南部の旧真正町の真桑地区には国指定重要無形民俗文化財の《真桑人形浄瑠璃》が伝えられており、《マクワウリ》の原産地としても知られている。

さらに、旧糸貫町地区は日本を代表する富有柿の産地で、県内最大のイチゴの里としても知られ、東海地方最大級の船来山古墳群(国指定史跡)がある。また数学のノーベル賞といわれる『フィールズ賞』の第1回目(昭和11/1936年)選考委員まで務めた世界的な数学者・高木貞治博士(明治8/1875年〜昭和35/1960年)の生誕地としても

広く知られ、多目的施設・富有柿センターの3Fには、高木貞治博士の生涯の事績を顕彰する《高木貞治博士記念室》がある。

この高木貞治博士の生誕地であることにちなみ、本巢市が精力的に展開しているのが、全国的にも珍しい《数学のまちづくり》だ。

自ら考える習慣を育む 《数学のまちづくり》

「根尾川をはじめとする豊富な水資源と肥沃な大地に恵まれた濃尾平野の真ただ中に位置する本巢市では、果樹や野菜、米などの生産が昔から盛んでした。また、ミニバラが日本有数の出荷量を維持するなど、観賞用花卉類の生産地としても知られています。本巢市の現在最大の産業は製造業ですが、こうし



世界的な数学者・高木貞治博士を顕彰する「高木貞治博士記念室」



「数学ワンダーランド」「高木貞治博士記念室」も入居する多目的施設・富宥柿センター

になりました」（藤原市長）

数学が中心の理数科教育に力を入れる都市の事例は少なくない。だが数学が媒介の多彩なまちづくり事業を通じ、決して理数系に偏らずに自分で物事を論理的に考え、解決することのできる豊かな情操を総合的に醸成しようとする「次世代育成事業」を推進・発信している都市は、全国的にも恐らく類例がないのではないだろうか。

本巣市作成の「数学のまちづくり事業構想図」を基に具体的な取り組みを挙げると、大要、次のような事業が毎年行われている。

まず「①小中楽校」は、市内全小中学校の児

童・生徒の算数・数学の「能力」や「才能」を伸ばすことを主目的に、ユニークで解き応えのある問題を学校授業で取り扱い、粘り強く思考することのさまざまな効果、解けたときの喜びや楽しさを味わわせるためのプログラムだ。

そして「②数楽校」は、算数・数学検定の合格を目指す「検定楽校」、高度な数学に取り組み、個々の学力を向上する「ジャンプアップ楽校」、算数・数学の楽しさを直感的に感じさせてくれる「STEAM楽校」を展開し、子どもたちの算数・数学への興味をより高める取り組みを実施している。

「③算数ウォークラリー」は、例えば高木貞治博士のゆかりの地などをウォークラリーす

ることにより、算数への興味を多角的に醸成する小学生向けの事業だ。さらに論理を組み立てる力、粘り強く思考する力を育てるような設問を中心とした問題に取り組み「④算数・数学甲子園」。子どもたちに算数・数学の研究を促す「⑤算数・数学コンクール」などの他、これらの取り組みを講演会や展示などを通じて内外に発信する「⑥「数学のまち」の発信」事業など、実に多彩な取り組みが行われている。

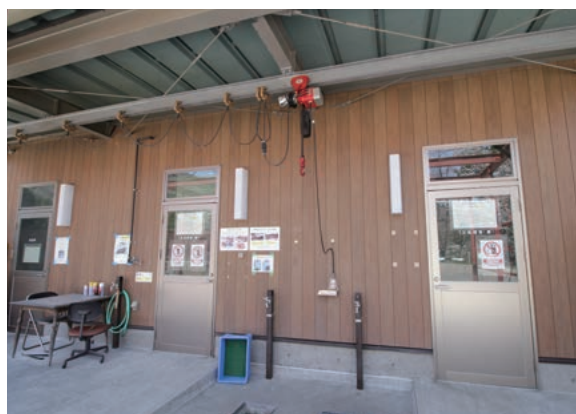
特筆すべきは本巣市の《「数学のまちづくり」の各事業には、独立行政法人国立高等専門学校・岐阜工業高等専門学校や岐阜県立本巣松陽高等学校、岐阜第一高等学校など地元で立地する高校の生徒たちが、小中学生の指導役として積極的にボランティア参加していることだ。さらに「本巣市数学のまちづくり学術アドバイザー」を務める秋山仁・東京理科大学特任副学長および、東京理科大学・数学体験館からも手厚いサポートを受けている。

「国指定史跡・船来山古墳群の麓にある多目的施設・富宥柿センター2Fには、東京理科大学・数学体験館が全面監修した算数・数学の楽しい体験コーナー《数学ワンダーランド》がありますし、秋山仁先生には定期的に講演会などの開催をお願いしております。

また、地元で立地する独立行政法人・岐阜高専とは地域連携協定、岐阜県立本巣松陽高校とは包括連携協定を結ばせていただき、生徒たちには小中学生の数学のコーチ役などを随時お願いしております。私立の岐阜第一高



船来山古墳群の麓に立地する考古博物館「古墳と柿の館」



災害対策の一環で処理されたジビエ肉料理は最新の本巢市名物(里山ジビエ処理施設)



富有柿は本巢市の重要な地域財産の一つ(旧糸貫町地区)

校の生徒たちも合わせ、実は彼らの多くが小中学生時代に本巢市の《数学のまちづくり》を経験し、育った世代なのです。

《数学のまちづくり》のこうした多角的で継続的な取り組みが総合的に評価され、本巢市教育委員会は昨年(令和2年)9月、文部科学省主催「第28回実用数学技能検定「数研」グランプリ」で文部科学大臣賞(公教育団体部門)を受賞いたしました(藤原市長)

未来を照らす

《数学のまちづくり》の基本精神

公教育の一環としての《数学のまちづくり》

が目指すのは、単に算数や数学の得意な子どもたちを増やすということではない。

「算数や数学への多角的な探求を通じて、自分で物事に常に正面から取り組み、そこから課題を見つけ出し、解決策を見つけていく論理的な思考法を、次世代を担う子どもたちに身に付けてもらうこと、それが一番の目的なのです」(藤原市長)

《数学のまちづくり》にボランティア参加する地元高校生たちの姿も、そういう意味合いにおいて《数学のまちづくり》が育てつつある次世代の具体的な姿の一例を示している。たとえ彼らが進学・就職などで故郷を離れたとしても、本巢市発のそのDNAは生涯、生き続けるはずだ。

折しも取材前々日の令和3年3月22日には、本巢市から通っている生徒も多い、隣町・

本巢郡北方町に立地する岐阜県立岐阜農林高等学校動物科学科の生徒たちが、自分たちの開発した本巢市産富有柿をたっぷり使った《柿アイス》の試食会を本巢市役所で開催し、藤原市長と一緒に記者発表を行っている。

同校では以前にも本巢市の旧真正町真桑地区の特産・マクワウリを使ったアイスクリームを開発し、好評を博している。今回の柿アイスの開発に携わった生徒たちも「地域特産の味をもっと全国の人に知ってほしくて企画しました」と笑顔でメディアに語った。

自分で物事を論理的に考え、その本質を楽しく学びながら新たな課題を見つけ、課題の解決策を見つけ出していく。そんな学びの循環を目指す《数学のまちづくり》の基本精神は、次世代の手によって、本巢市を軸とする周辺地域にも少しずつ、だが着実に拡大発信されつつある。隣町の高校生たちによる《柿アイス》の事例は、その一つの証左といえるだろう。

(取材・文：遠藤隆／取材日令和3年3月24日)